

令和 6 年 6 月 23 日現在

機関番号：32687

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2019～2023

課題番号：19K00862

研究課題名（和文）英語で学ぶ日本史の効果的指導に関する研究：語学力向上と国際的視野育成の観点から

研究課題名（英文）Effective Methods for Japanese History Instruction in English: Developing Language Skills and Fostering Global Perspectives

研究代表者

亀井ダイチ 利永子（Kamei-Dyche, Rieko）

立正大学・データサイエンス学部・准教授

研究者番号：50779692

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,400,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の大きな成果としては、次の3つの点があげられる。ひとつは英語で書かれた日本史に関する文献を幅広く収集し、その言語面、内容、アプローチ（網羅している範囲）等を調査したこと。ふたつめは、日本史関係の授業を英語で開講する複数の大学にて実地調査を行い、研究者同士の情報交換と学生に対するアンケート調査を通して、学生が類似科目において抱く期待とともに、その問題点を明らかにすることが出来たこと。これらの調査の結果の一部は論文化している。また最終年度には高校の日本史教科書としては長年採択率トップを誇る山川出版社の詳説日本史の英文版を共訳にて完成させ、ひとつの新しい教材の形を示した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

英語で日本史を学ぶという授業において、どのような教授法が効果的なのかについて語学力向上とグローバルな視野の育成というふたつの観点からその指導法を検討し、新たな教材開発を目的とした本研究のひとつの意義は、それぞれ別個のものとして発展してきた語学教育と日本史研究の双方を組み合わせることにより、グローバル化が進む現代社会の需要に応えた点にある。また本研究による実践と指導法の模索は、今後の社会情勢の変化にも対応した英語教育の充実に貢献し今後におけるひとつのモデルケースを提示した。また新たな教材として日本史教科書の英語版の共訳を完成させることが出来た。

研究成果の概要（英文）：This research project has resulted in three significant outcomes. The first was a literature review tracing the trajectories of English-language writing on Japanese history, focusing especially on language matters, content coverage, and methodological approaches. Second, field surveys were carried out at various universities that offer Japanese history courses in English. Through exchanging information with researchers and conducting surveys with students, it was possible to articulate both the expectations students have for related subjects and the issues that they face. Some of these issues were subsequently documented in a research paper. Lastly, in the final year of the project, the co-translation into English of Yamakawa Shuppansha's Shosetsu Nihonshi, which has long occupied the top adoption rate among secondary school Japanese history textbooks, was completed.

研究分野：日本史、英語教育

キーワード：英語教育 日本史 グローバルな視野 翻訳 語彙 指導法

## 様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

### 1. 研究開始当初の背景

外国語教育としての英語教育については、実践・理論的アプローチともに相当な蓄積がある。「読む」「聞く」「話す」「書く」の「4技能」のそれぞれに対しその効果的な指導法や学習者の問題点の洗い出しなど、今までにも様々な取り組みが行われ多くの成果を生み出し、英語教育の発展に貢献してきた。その反面、グローバル化の動きと共に英語でなんらかの科目を学ぶ科目を提供する大学は増えてきているが、その指導法については教員個人に任せられており、その指導における課題や教育効果等については外国語教育としての指導方法に比べるとわずかな蓄積しかない。またそうした授業の多くは英語圏を中心とした国からの留学生や、既にならかなり高い英語力を持つ日本人学生が対象になっていることが多く、この場合敢えて「語学力」の向上をその授業の構成に考慮せずともよい状態にある。研究代表者の勤務する大学でも英語を学ぶのではなく英語で学ぶ、という All English Program というプログラムが開講されており、申請者は古代から近現代にわたる日本史の概論的な授業を担当してきているが、このプログラムは学生の学年や専門を問わず全学の学生の履修が可能となっており、履修学生の9割以上は日本人学生である。そのため、本研究では留学生対象の科目ではなく、日本人学生、あるいは近年増えつつある日本人学生と留学生がともに学ぶ形式の授業を対象にすることにした。また本研究では英語で開講する授業の内容を日本史に限定するが、それは上述したグローバル化の進展の中で世界とのかかわりの中で日本を理解していくためには、日本の文化や思想を培ってきた歴史を、国史としてではなく世界史の枠組みのなかで理解していくためには恰好の分野と思うからである。日本史をグローバルな視点から捉えるという視点をもった研究は近年増加傾向にあり、これからの日本研究のあり方のひとつとして既に認識されている。

本研究は、それぞれ別個のものとして発展してきた語学教育と日本史研究の双方を組み合わせることにより、現代社会の需要に応えるものである。

### 2. 研究の目的

本研究の目的は、英語で日本史を教えるという形態の授業において、語学力の向上と日本史に対するグローバルな視点の育成を行うためにはどのような指導方法が効果的なのか、授業実践等を通して分析し、また新たな教材開発のための基盤を構築することにあつた。英語を母国語としない日本人大学生を対象に、語学の科目として英語を教えるのではなく、また母国語である日本語ではなく、敢えて英語という外国語を通して母国の歴史を教えるということから得られる意義を、学生の「語学力向上」と「国史という枠を超えたグローバル的な視点を養う」という観点からアプローチする。また比較対象として日本国外における学部生向けの日本史教育の実態についても調査し、外国語としての日本史用語の扱いや外国史としての日本史の位置づけを明らかにすることによって、日本の大学において英語で日本史を教授するための効果的な教材開発の基盤形成に繋げていくことを目的とした。

### 3. 研究の方法

本研究の方法としては、大きく分けて次の3つで構成される。

文献調査

指導法に関する実地調査・ネットワーク構築(日本国内外)

## 授業実践を通じた効果検証、および日本史教科書の英訳

文献調査については、主に初年度に実施。英語で書かれた日本史に関する文献(これには学術書のみならず、一向けの書籍も含まれる)を収集し、その語学レベル、取り上げられている内容、アプローチなどを対象に調査した。また実地調査として研究代表者の担当する授業を履修した経験のある学生を始め、類似科目を担当する複数の大学において、学生が「英語で日本史(あるいはそれに近い科目)」に対してどのような期待や困難を抱えているのかについてアンケート調査を行った。同時に、こうした科目を担当する研究者と指導法や使用する資料等に関して意見交換を行い、ネットワークを構築していった。また比較対象として日本国外における学部生向けの日本史教育の実態についても調査し、外国語としての日本史用語の扱いや外国史としての日本史の位置づけを明らかにすることによって、日本の大学において英語で日本史を教授するための効果的な教材開発の基盤形成に繋げていくことを試みた。そして上記の調査結果を基にいくつかの効果検証を行い、それを日本史教科書の英訳にも一部反映させた。

## 4. 研究成果

文献調査や学生へのヒアリング調査で明らかになったことのひとつは、日本史を英語で学ぶ上で学生が当初ぶつかる困難のひとつは、歴史的用語などの語彙である。歴史研究には多々の専門用語があり、簡単に英訳できないものも多い。それをどう説明していくか。また同じ言葉であっても時代によって意味に差異が生じており、一般的に紹介される「この言葉は英語で何々」という単純な言語の置き換えでは必ずしも通用しない。語彙の選択によっては意図しない誤解を招くこともある。それを学生に気づかせることにより、単語の意味の理解の深化、語彙の増加を図り、歴史的事象の解釈の差異や歴史の動きの捉えなおしを行うことが可能ではないではないかとの仮説の元、研究史や史学関係用語の英訳の分析を行った。こうした分析に関する成果は、ほんの一部であるが学部の SNS である Facebook や、大学が一般向けに行っているデリバリーカレッジでの講演(立正大学令和元年春期デリバリーカレッジ「天皇は emperor なのか? 歴史用語の英訳について考える」座間市開催)にも反映させ、社会に還元した他、広島市立大学でも日本史の英訳に関する講義を行い、学生および担当教員との意見交換を行っている。またこうした調査結果は「日本史を英語で学ぶ」とはどういうことか: All English Program の授業実践とその指導法」という論文にまとめた。「英語で学ぶ」という言葉からは、どうしても内容そのものよりも英語力の向上ばかりに関心を払いがちだが、学生へのヒアリング調査からは留学経験者のみならず、全体的に日本史が海外でどう教えられ、学ばれているのかについての関心が高いことが見て取れる。その他、当論文では学生の語学力の向上と内容理解を結びつけるための試みなどの授業実践とその効果の一部についても論じているが、学内・学外からいくつかのフィードバックも得ることが出来た。また文献調査の一環として英語圏の日本史研究の基本文献ともいえる Cambridge History of Japan の改訂をめぐる研究発表(「Cambridge History of Japan の改訂に見る英語圏の前近代日本史研究の変遷」)を行ったほか、英語圏で初となる女院の研究書の書評を執筆している(Kawai Sachiko, *Uncertain Powers: Sen'yōmon-in and Landownership by Royal Women in Early Medieval Japan* 『海外の中世日本史研究』 勉誠社、245-257 頁)。また大学の広報誌にも研究紹介として取り上げられた(研究事例紹介 04: 「英語で学ぶ日本史の効果的指導に関する研究: 語学力向上と国際的視野育成の観点から」語学教育と海外の日本史研究を組み合わせて新たな教材開発へ 『立正大学総合案内』 2020 8-8 頁)。

日本国内外における日本史教育法の実施調査は、コロナ禍のためにかかなりの制限を受けた。予

定より実施が相当後ろ倒しになり、また調査先もかなり限られることになったが、国内では京都外国語大学、青山学院大学、神田外語大学、皇學館大學、国外ではペンシルバニア大学、プリンストン大学の各大学で日本史関連の授業の比較対象を目的とした実地調査を行うことが出来た。特に海外の調査先のひとつであるペンシルバニア大学では、大学院生による学部生のチュートリアルセッションと講義を合わせて授業の構成等を確認。日本国内のみならず、国外での調査が可能になったことにより、文献調査を合わせて、外国史として日本史教育データを収集することが出来た。

コロナ禍をきっかけに、本研究の実践の場としていた授業の形式は全てオンラインに変わり、また 2021 年 4 月には新設学部への異動に伴いキャンパスも変わったことから物理的に対面授業が不可能になり、オンライン継続の中で指導法の効果実証を行わなくてはならない難しさが生じた。しかし極力対面に近い同時双方向性を継続し、学生の反応をその場で確認できる体制を整えた。さまざまな調査結果を基に、授業の中で時代の変化や視点（日本から見た国史としての日本史での取り上げ方と日本外でのアプローチの差）を意識させる語彙や資料を全体の中に入れて実証を行っていったが、本側の視点のみを超えた資料の紹介は、特にある程度日本史の前知識を有していた学生にはかなりの学習意欲を引き出す材料となった。言語面では当初は見慣れない語彙の連続に混乱する様子も見られたものの、単なる外国語としてではなく意味を考える表現を使う試みが一部確認できている。研究最終年には、高校の日本史の教科書として広く採用されていた山川出版社の『詳説日本史 B』を共訳で完成させたが（『Japanese History for High School』）、そこから浮き上がってきた日本史という内容を英訳する際の課題等に関する実際的なデータも、授業実践において還元している。多くの学生にとって高校時代に馴染んだ日本史の教科書が英語版となったことは、日本史は日本語で日本国内で理解すれば良いものではなく、世界史の流れの中に位置づけて「外から」見ることも必要であるというグローバルな視野を育成させていくきっかけになる。またこの日本史教科書の英訳は、それぞれの語彙の選択による意味の違い（特定の訳語の選択）についても Translates ' Notes の形で含めてあり、その点においても簡単な英語を使って説明するだけではない、新しい教材の形を示すことが出来たと考える。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 亀井ダイチ利永子	4. 巻 144
2. 論文標題 「日本史を英語で学ぶ」とはどういうことか : All English Programの授業実践とその指導法	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 立正大学文学部論叢	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計3件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 1件）

1. 発表者名 亀井ダイチ利永子
2. 発表標題 日本文化の世界への発信 歴史用語の英訳の現状と課題
3. 学会等名 広島市立大学
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 亀井ダイチ利永子
2. 発表標題 Cambridge History of Japanの改訂に見る英語圏の前近代日本史研究の変遷
3. 学会等名 立正大学人文学研究所
4. 発表年 2020年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 佐藤信 五味文彦 高埜利彦 = 編 近藤成一 = 翻訳監修 亀井ダイチ利永子 亀井ダイチ アンド リュウ = 翻訳	4. 発行年 2024年
2. 出版社 山川出版社	5. 総ページ数 512
3. 書名 Japanese History for High School	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------